知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

August 2022 8

金次郎異聞

金次郎異聞

日本の小学校の共通マスコットといえば二宮金次郎。
着物姿で草鞋履きの少年が、親の手伝いで
拾ってきた薪を背負い、道すがら本を読むその姿は、
馴染み深い割に語られることが少ない。
そんな金次郎像の秘密に迫る。

旧大井小学校（南知多町） 製造年不詳

表紙：旧三和東小学校（常滑市） 昭和18年製造、水上水玉作

金次郎像は多彩である

本誌エリアの小学校、もしくはかつての小学校所在地で金次郎像が置いてあるのは十九校。姿はすべて同じだが、じっくり観察してみるとそれぞれに個性があることに気付く。特に顔立ちは様々で、そこには作り手の感性や技量が反映されていて面白い。

材質は石像、陶像、木像の三種類（他地域には銅像やセメント像もあるが、本誌エリアには存在しない）。この地域で圧倒的に多いのは石像で、十五体を数える。背丈はまちまちだが、平均するとだいたい一メートル、小学校低学年といったところか。その中でとびぬけて大きいのが旧豊丘小学校（現豊丘むくろじ会館）の像。校門脇の植え込みの中に一メートル六〇センチもある像に見下ろされると、なかなかの迫力だ。

陶像は三体。そのうちの一つ、旧三和東小学校（後に三和東幼稚園として使用）の金次郎像（表紙）は、いかにも常滑焼らしい土色の肌で、

旧三和西小学校(常滑市)　製造年不詳

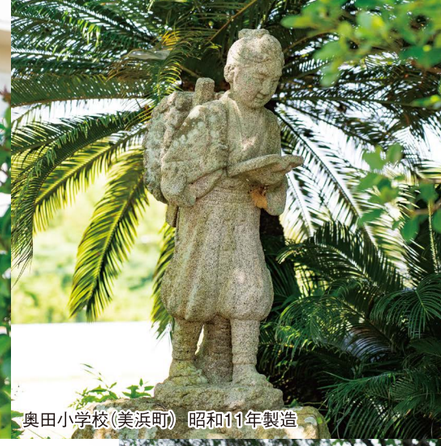
武豊小学校(武豊町)
平成30年製造、太田貴之作

上野間小学校(美浜町)　製造年不詳

日間賀小学校(南知多町)　昭和9年製造

小鈴谷小学校(常滑市)　昭和10年製造

内海小学校(南知多町)　製造年不詳


奥田小学校(美浜町)　昭和11年製造

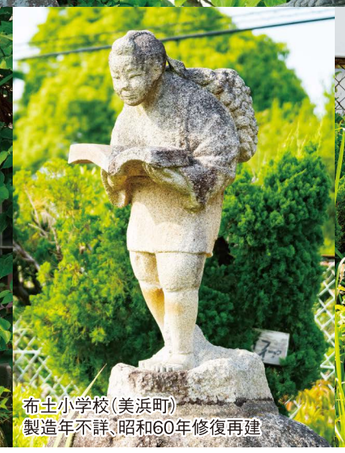
旧豊丘小学校(南知多町)　製造年不詳

大野小学校(常滑市)　昭和10年製造

旧山海小学校(南知多町)　製造年不詳

旧小野浦分校(美浜町)　製造年不詳

鬼崎南小学校(常滑市)　昭和9年製造


布土小学校(美浜町)
製造年不詳、昭和60年修復再建

野間小学校(美浜町)
昭和28年製造、前川指月作

旧河和南部小学校(美浜町)
昭和11年製造

なめらかでやわらかな印象を受ける。背中には「水玉(すいぎょく)」の銘が刻まれているが、これは大正から戦後にかけて陶彫の分野で活躍した水上水玉(文吾)のこと。明治十七年(一八八四)常滑町に生まれ、常滑工業補習学校(常滑高校の前身)で美術彫刻の技術を学び、卒業後は東京や備前焼の職人のもとで研鑽を積んだ。常滑に戻ってから美術彫刻、肖像、玩具などの制作に取り組み、そのかたわら若手陶工グループの会長、町会議員、陶器工業組合の専任理事を務めるなど、人望篤い人物だったという。

この像が作られたのは、三和第二国民学校と称していた昭和十八年(一九四三)。実はその四年前に、地元の厄年仲間が資金を出し合って金次郎の銅像を寄付していた。しかし、戦時体制に入ると武器生産に必要な鉄材が不足し、民間から鉄材を提供させる金属類回収令が発令されたため、金次郎の銅像も軍に供出されてしまった。その代替として置かれたのがこの陶像なのである。ちなみに知多市の岡田小学校にも水玉作の陶像がある。

木像は武豊小学校の一体のみで、校舎内の玄関ホールに置かれている。武豊小にはかつて石像があったのだが、劣化が進んで平成二十八年(二〇一六)に倒壊。これを嘆いた卒業生の筒井康雄さんが、豊橋市出身のチェーンソーアート作家太田貴之さんに依頼し、平成三十年(二〇一八)にこの木像が誕生した。皺のような木目で渋い顔立ちになっており、造形もなかなかワイルドだ。

武豊小学校の石像
平成26年1月撮影

金次郎像は岡崎から広まった

そもそも二宮金次郎とは何者で、なぜ小学校に置かれるようになったのだろうか。

金次郎は通名で、本名は尊徳という。江戸時代後期の天明七年(一七八七)、相模国栢山(かやま)村(現神奈川県小田原市)の生まれ。生家は比較的裕福な農家だったが、十代のころ洪水で田畑が失われたのを機に没落し、父母との死別や一家離散を経験。この逆境をバネに学問と農家経営の基礎を独学で学び、やがて土地を買い戻して家を再興する。才覚を見込まれて、財政困難に陥っていた小田原藩家老家の再建に携わりこれを成し遂げると、藩も金次郎を重用し、貧しい農村の再興事業に取り組むようになる。その評判が広まり、やがて金次郎は全国諸藩や農村から再建の指導者として引く手あまたの存在になった。

金次郎は単に農業経営や財政再建のスペシャリストというだけでなく、思想家でもあった。金次郎は各地での改革にあたり、必要なのは「倹約、労働、自己犠牲」であることを説き、率先して行動してみせる。これを金次郎は「報徳」と呼び、官民を問わず幅広く共感を得た。奥田小学校の金次郎像の台座に「勤倹力行(けんりっこう)」という言葉が刻まれているが(扉下段右端の写真)、これは金次郎のモットーで「勤勉に働き、倹約に努め、努力して行う」という意味である。金次郎は安政三年(一八五六)に七〇歳で死去するが、死後、全国に報徳運動が広まり、誰もが知る存在になった。

そんな金次郎が小学校と結びついたのは、明治三十七年(一九〇四)に発行された修身(今の道徳)の国定教科書に、模範的少年の例として取り上げられたことが始まり。すなわち、貧しさに負けず、両親を手伝い、その合間にも勉強に励んだ、という金次郎少年の像が表す姿である。以後、金次郎のエピソードは教科書の定番になり、子供にも次第に馴染み深い存在になっていった。

やがて、シンボリックな金次郎の像が小学校に設置されるようになる。全国初の小学校の金次郎像は、大正十三年(一九二四)に豊橋近郊の前芝小学校に地元出身の国会議員が寄付したセメント製のもの。こ

子供たちの元気な声は、金次郎にも聞こえているのだろう。

豊浜小学校（南知多町） 製造年不詳

れを皮切りに少しずつ金次郎像が出回り始めるが、昭和初期にはまだ数は少ない。爆発的に広まったのは、昭和八年（一九三三）から十五年にかけての時期だ。火を付けたのは、全国有数の石製品産地として知られる岡崎の石屋たちだった。

当時は昭和恐慌の真っただ中で、主力の灯籠をはじめとする石製品の売り上げは落ち込む一方だった。これを打開する新商品として考案されたのが金次郎像である。折しも貧窮した農村で報徳思想を基盤にした「自力更生」の取り組みが広まっているさなかで、金次郎の存在感は増していた。岡崎の石業界では、彫刻技術を駆使してより洗練されたスタイルの金次郎像を開発し、各地の産業博覧会への出品、全国小学校校長会でのプレゼン、有力政治家を賛助会員に迎えた「二宮尊徳先生少年時代之像普及会」の結成など、精力的な宣伝活動を展開する。

これが大ヒットし、金次郎の石像は瞬く間に全国の小学校へ広まっていった。普及の背景には、金次郎の勤勉さや孝行ぶりが天皇を中心とする軍国主義体制の思惑と合致したこともある。しかし、戦後も撤去されなかった例が多いことを考えると、単純に「小学校のマスコット」くらいの認識だったのかもしれない。ある調査によると、愛知県では戦前に開校した小学校のほとんどに置かれ、昭和四十年代半ばの時点ではその大半が残っていたという。不在の小学校にも、かつては金次郎像が存在した可能性はある。

金次郎像ブームは銅製品産地や陶磁器産地にも好影響をもたらし、銅像や陶像も普及することになった。例えば備前焼産地を擁する岡山県では、県内の小学校に現存する金次郎像のうち実に八割以上が陶製とか。ならば知多半島には常滑焼の像がもっとあってもよさそうなものである。それなのに数が少ないのは、岡崎に近いゆえ開発に着手する間もなく石像が普及してしまったからか、あるいは他の陶製品が好調で開発を試みる陶工がいなかったからか。

常滑西小の金次郎を探る

常滑市内には旧三和東小のほかにもう一体、常滑西小学校に陶製の金次郎像がある。

常滑市街の中心部にある常滑西小は、明治五年（一八七二）の学制発布とともに瀬木、北条、奥条に開校した三校をルーツとする歴史の古い学校だ。かつては常滑小学校と称していたが、ピークの昭和三十一年（一九五六）には二千人超の児童を抱えるマンモス校で、昭和五十五年（一九八〇）に東小と西小に分離した。常滑焼のお膝元の小学校らしく校内にはさまざまな陶製作品が展示されており、体育館の巨大陶壁、昭和の若手作家たちの作品、沿革を記したタイル製の塔、子供たちが作った人形など、学校全体が屋外ミュージアムの様相を呈している。

その中で、平成二十九年（二〇一七）に作られた金次郎像は比較的新しい作品である。当時のPTA会長の関豊晃さんが寄贈し、陶彫作家の武山宗憲さんが手掛けた。旧三和東小の水玉の像は石膏型を使った量産品だが、こちらは一点もの。凛々しい表情が印象的だ。関さんはセラモールに店舗を構えるヤマチョウ豊和製陶の代表取締役。「自分の子供も通っている母校に金次郎像がないのは寂しいし、子供たちに勤勉の大切さが少しでも伝われば」と、当時の校長先生と相談して設置しました。常滑の小学校にはやはり陶製がふさわしいと思います」と話す。

常滑西小にはもとから金次郎がいなかったわけではなく、少なくとも東西に分離する以前には金次郎の石像が存在したようだ。戦前の卒業生は、校庭の西側に建っていた校長室・職員室棟の前に奉安殿（昭和天皇の御真影や教育勅語の保管庫で、終戦直後に撤去された）と並んでいた記憶があるという。また、木造校舎から鉄筋校舎に建て替わった昭和四十年代半ばの卒業生は、校庭南側の木造校舎跡地に造

昭和から令和まで、金次郎像は生き続けている。

とこなめ陶の森資料館　製造年不詳、秘色焼作

常滑西小学校（常滑市）　平成29年製造、武山宗憲作

成された花壇のところにあったと語る。それが、いつ頃、なぜいなくなったのかという情報は取材時に得ることができなかった。御存知の方はぜひCCNCまでご一報いただきたい。

それはさておき、作者である武山さんによると、この陶像の姿勢や細部のアイテム類は、とこなめ陶の森資料館の前庭に置いてある像を参考にしたとのこと。その像は前庭の片隅に、館内展示できない大物の陶製品に混じって置かれている。全体に白い釉薬が掛かっており、ところどころに掛けムラも見られる。本物の木の枝を麻縄で縛り背中に引っ掛けて演出しているが、それを外すと背中に四角い穴が空いている。もとは別に焼いた陶製の薪をここに嵌（はめ）込んでいたらしい。

これを作ったのは、今はなき秘色（ひしょく）焼（やき）という窯屋である。大正十一年（一九二二）に柴山三郎が創始し、主力製品は花瓶だった。中国古陶に魅せられた三郎が独自の釉薬を開発し、常滑ではほとんど前例のない風雅な施釉花瓶を世に送り出してきた。高級花器メーカーとして知られ、華道の世界では確固たる地位を築いていたという。

そんな秘色焼が、なぜ専門外の金次郎像を手掛けたのか。三郎の甥で秘色焼ではデザインを担当していた柴山耕三郎さんによると、詳しい経緯はまったくわからないが、おそらく戦時中に作られたものと推察する。花瓶だけでなくノベルティや軍用品など多様な製品に携わってきた有力メーカーだったので、このようなイレギュラーな依頼も受けたようだ。「当時、秘色焼に腕のいい原型師がいたので、その人が元を作ったのかもしれませんね。陶の森の像は釉薬のムラがあって不出来なので、出荷されないまま工場に残っていたのでしょう」と柴山さんは話す。

常滑西小の関連ではようやくここまでわかったが、各校の金次郎像については資料が少なく、謎が多い。令和の時代には、ちょっとミステリアスな存在ではないか。

〈取材協力・資料提供〉関豊晃さん／武山宗憲さん／柴山耕三郎さん／渡辺美佐さん／三浦茂さん／とこなめ陶の森／掲載写真の各小学校／常滑市立三和西保育園

〈参考文献〉常滑陶器誌（常滑町青年會）／常滑市学校教育100年誌（常滑市教育委員会）／愛知県近代教育百年史稿（高橋一司・中西光夫）／
石都岡崎 石と共に生きる 組合設立100年記念誌（岡崎石製品協同組合連合会）／二宮金次郎とは何だったのか 臣民の手本から民主主義者へ（小澤祥司・西日本出版社）／二宮金次郎像（http://kinjiro.a.la9.jp/）